

---

# テアの日記と手紙

&gt;&gt;2

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テアの日記と手紙

### 【Nコード】

N5519X

### 【作者名】

<<2

### 【あらすじ】

パウル・フォン・オーベルシュタインの妹の日記。

これ続くんか・・・？

銀英伝の歴史に一切関わらない主人公です。

テア日記（帝国暦四八七年 四月一〇日）

帝国暦四八七年、四月十日

私の名前はテア・フォン・オーベルシュタインっています。  
帝国暦四七八年生まれで、オーディン初等学校に通っています。  
家族はパウロお兄ちゃんと、執事のラーベナルトと三人で暮らしています。

お兄ちゃんは帝国の軍人さんで、階級は大佐さんです。  
いまはイゼルローンっていうところにおいて、お国のために戦っているのです。

お兄ちゃんが帰ってきたら、一緒に国立公園でキャンプしようって約束したの。  
お外でキャンプなんてしたことないからすごく楽しみ。  
一緒にね魚釣りしたり、お料理したり、テアは足が悪いからあまりこついうことしちゃいけないって言われてるんだけど、お兄ちゃんと一緒にいいんだって。  
キャンプに行ったら、ラーベナルトはお留守番させて二人でたくさん遊びたいな。

早くお兄ちゃん帰ってこないかなあ……  
学校でそういうこと言うと、クラスの子がね非国民だって言うのでもね、その子は戦争でお父さんを亡くしてるんだ。  
ほかにもそんな子はいて、その子達の前ではできるだけそういうことは言わないようにしています。

今日はお兄ちゃんにお手紙を書きます。

お兄ちゃんが軍人さんのお仕事頑張ってるから、テアも頑張った

ことを書いてます。

苦手なお野菜を食べてみたり、算数でいい点取ったり、お兄ちゃんに褒めてもらえることを考えたりして実践してます。

ラーベナルトに手伝ってもらってお料理もできるようになりました。

お兄ちゃんが帰ってきたら好きなもの作ってあげるから、リクエ  
ストしてねって書きました。

最後に、テアは元気です、と書いてメールを送りました。

ちゃんと届くといいなあ。

テア日記（帝国暦四八七年 四月一二日）

帝国暦四八七年、四月十二日 イゼルローン要塞

「貴様の意見など訊いておらん。下がれオーベルシュタイン、大局を知らぬ大佐風情が出すぎた口を叩くな」

イゼルローン要塞駐留艦隊司令官、ハンス・デイトリツヒ・フオン・ゼークト大将の叱責する声が議場に鳴り響く。

おりしもイゼルローン要塞の防衛方針における二人の大将の意見がぶつかり合っているところであった。

埒もない痴話喧嘩のようなものだ、と参列していた幕僚将官達は沈黙を決め込んでいた。

防衛部隊司令官のシュトゥックハウゼン大将と、駐留艦隊司令官のゼークト大将の不仲はあまりにも有名なものだったから、誰もが口を挟むことを憚っていた。

その無益な口争いに口を出した一人の男が意見具申を述べたことから、ゼークトの怒りはその男に向かったというわけである。

誰も助け舟を出そうとはしなかった。

むしろ、議題を正しい方向に向けるための意見であったが、内心はうんざりしていたシュトゥックハウゼンもオーベルシュタインを一瞥しただけで何も言おうとはしなかった。

パウル・フォン・オーベルシュタイン大佐。

酷薄な表情を崩さないこの男をゼークトは普段から気に入らず、例え正論であろうが感情的な理由からその意見を無視しがちであった。

気味が悪い、というのが第一の理由である。

またそれほど面と向かって言わぬが、オーベルシュタインの両目

は義眼であり、正常な四肢と健康な肉体を持つ健常者が賛美される一方で、不具者である者を蔑む風潮が帝国内部の古き慣習として、未だなお残っていた。

劣悪遺伝子排除法は現在は実質無効化されてはいるものの、古い世代には血肉に刻み込まれた、ゴールデンバウム王朝の忌むべき悪しき因習だった。

厳しく叱責され、退出を命じられると、オーベルシュタインは表情を変えることなく敬礼をしてみせると、議場から立ち去った。

『オーベルシュタイン大佐、メールが届いております。』

差出人：テア・フォン・オーベルシュタイン』

自室に戻るとオーベルシュタインはメッセージを確認し、通信室へと向かう。

心なしかその足取りは早い。

すれ違った兵士達の先頭の一人に肩先でぶつかっていた。

「失礼、急いでいるので」

「はっ、申し訳ありませんでした」

その返答を無視して立ち去るオーベルシュタインの背中を、ぶつかられた兵士は敬礼しながら何事かとそれを見送った。

彼等の知る限りオーベルシュタイン大佐が理由なしにその歩速を早めることがない。

通信機にメールのIDパスワードを打ち込んでメール受信の一覧を開く。

最後の通信メールは三月二十八日。

新しいメールは四月一〇日の発信になっていた。

一覧はラーベナルトとテアのもので占められている。

ラーベナルトのものはオーディンの屋敷での経理的なものがほとんどだった。

その報告をざっと流し読みするとオーベルシュタインはテアのメールを開く。

お兄ちゃんへ、から始まるいつもの出だしである。

最後まで読み終わると返信の欄を開いていた。

>>お兄ちゃんの好きなもの作ってあげるね。

テア、私に好き嫌いはない。

何でも食べれるから心配しなくていい。

火と包丁を使うときは必ずラーベナルトをつけなさい。

勝手に厨房を使わないように。

追記に少し考え込んでから、ラーベナルトの報告を思い出す。

オーベルシュタイン家の隣家の友人と喧嘩中だという注釈があったのだ。

ここは兄として一言添える必要があると判断していた。

【友達とは仲良くしなさい】

お隣のマーガレット嬢は少し気分屋なようだ。

この間泣かせたようだが、ちゃんとテアから謝りなさい。

テアにとって大切な友達を遠ざけてはいけない。

>>テアは元気です。

私も元気になっている。

すぐには帰れそうにないが、帰ったらキャンプに行こう。

ラーベナルトの言うことをよく聞くように。

返信。

エンターキーを押してメールが送信状態になったのを確認して、

ようやくオーベルシュタインは軽い溜息を吐いた。

少なくとも年内いっぱいはいゼルローンにいることは確定しているからだ。

しかしながら、オーベルシュタインがオーデインに帰還するのは予想よりもずっと早くのことであった。

その波乱の運命をまだ彼も知らない。

テア日記（帝国暦四八七年 四月一三日）

帝国暦四八七年、四月十三日 オーベルシュタイン家

学校から帰ったテアはずっと考え事をしていた。宿題のノートを開いて、ペンを持っていたけれど、気もそぞろで一行も進んではいなかった。

窓には雨が打ち付けて空は曇り空。

パシパシと水滴が棧を打って、どうにも勉強に身が入りそうになかった。

気持ちまでどんよりしてしまいそうな空だった。

窓ガラスに映るのは灰色の髪に青い瞳を持ったテアの顔である。

憂鬱な空に感化されたようで、テアはつまらなそうな表情で空を見上げていた。

「お嬢様、失礼いたします」

執事のラーベナルトが扉を叩いて入ってくる。

お盆にティーセットを乗せ、甘やかなシナモングラッセの香りを漂わせていた。

途端にテアのお腹はキュウツと小さく鳴って、宿題のノートのことは頭からすっかり放棄してしまっていた。

「考えすぎて疲れちゃった。あ、お砂糖は二杯ね」

「はい、お嬢様」

そう答えたラーベナルトが砂糖が入った瓶から二杯分の砂糖をカップに注いで、窓際にあるお茶用の小さな円形のテーブルの上にお

茶用の食器を並べていく。

このテーブルは造りが凝っていて、貴族の家にあるような瀟洒な雰囲気醸し出していたから、テアが一番のお気に入りであった。いつものお茶とケーキの時間である。

ラーベナルトはこう見えてもお菓子作りが得意であったから、この時間はテアにとっては至福のひとつの時間でもあった。

老執事が椅子を引いて一歩下がると、優雅とはいえないものの淑女らしさをだそうと、不自由な足を引きずって、苦勞して座っていた。

ティーセットは父母の代から使っているもので、これは正当な遺産品としてテアに譲渡されたものだった。

シンプルなデザインで、カップや受け皿の紋様は青い波のようで、その微妙に淡い色彩を気に入っていた。

紅茶の葉は市場でラーベナルトと一緒に選んだもので、お兄ちゃんが帰ってきたらテアがお茶を淹れて上げるつもりで買ってきたものだった。

茶葉の良し悪しはラーベナルトの鼻が頼りで、テアの嗅覚では茶葉の匂いの区別はまるでつかなかった。

お茶に関してはもっと勉強が必要だった。

白い清潔なテーブルクロスに新しく活けられた、青い可愛らしい花が細い花瓶に挿されて、テーブルの上の彩りを豊かなものにしていった。

紅茶の香りを楽しみながら、ラーベナルトの焼いたケーキを勿体ながらも小さなフォークで切り分けて口に運ぶ。

口の中に広がる独特の香りに鼻孔も刺激されて、テアは味わいながらゆつくりと紅茶を飲むのだった。

いつもであれば、この時間はもつと騒々しく、心浮き立つもので、楽しい時間のはずであった。

ハシバミ色の瞳を持つ、活発で明るい少女がお茶の時間をより楽しいものにしてきたからだった。

そのことを思い出して、テアは食べるのに夢中なフリをして、窓の外から見える隣家の茶色い屋根を見詰めていた。

雨は強く、視界は煙っていた。

テアの心を曇らせる原因は幼馴染であるマーガレットとの喧嘩が原因だった。

「いつも賑やかなマーガレットお嬢様がいないと静かですなあ……」

二人の仲たがいを知ってか知らずかラーベナルトが余計なことを言う。

「知らないわ、あんな子」

少し乱暴にカップを受け皿に置いて、テアは腕を組んで窓の外の景色を見ているフリをする。

ラーベナルトの白い分厚い眉毛がわずかに動く。

「何でもお風邪を召したとか……」

「え？」

「一昨日、川に落ちられて全身ずぶ濡れだったそう……」

今日学校で会わなかったのは風邪を引いていたからだとわかったけど、ラーベナルトは知っててテアに言わなかったのだ。

だけどそれを攻めるより、テアはその原因が自分にあることを誰よりもよく知っていた。

マーガレットが川に落ちたのは不用意な彼女が悪かったのだが、

テアの胸の中に途端に罪悪感が芽生えて、思わず立ち上がった。  
ガチャリとテーブルの上の食器が音を立てる。

「お下げいたします」

「うん……」

丁寧に頭を下げ退室したラーベナルトがいなくなると、室内には  
雨音と古びた時計の針の音だけがこだまする。

テアはベッドに身を投げる。

柔らかい感覚とスプリングのばねが音を立てて、この小さな暴虐  
者の体重を受け止める。

制服のままで皺になるとわかっていたが、テアの頭の中は一つの  
ことがグルグルグルグルと周っていた。

すなわち、テア・フォン・オーベルシュタインはマーガレットと  
の関係をどうしたいのか？

何だか考えすぎてしまって疲れたのか、不意に訪れた眠気に誘わ  
れて、テアは眼を閉じていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5519x/>

---

テアの日記と手紙

2011年11月7日16時03分発行